77. 当院におけるERCP（特に胆道系）のルーチン撮影体位の検討

神戸市立西市民病院 放射線科

○大池克己

古川 宗

松井克洋

北本雄一

(Doike Katsumi)(Furukawa Hajime)(Matsui katsuhiro)(Kitamoto Yuuichi)

真田 明

橋本勝昭

竹内亨斉

夜久 修

(Sanada Akira)(Hashimoto Katsuaki)(Takeuchi Kousai)(Yaku Osamu)

〔はじめに〕

当院においてERCP（内視鏡的逆行性胆管・膵管造影）は、昭和50年頃より行なっているが、ルーチン撮影法（撮影順序と撮影体位）は特に決めていなかった。

今回、我々は、ERCP（胆道系）でのルーチン撮影法を検討したので報告する。

〔使用機器〕

X線高電圧発生装置：HD-150-60G

X線透視撮影台：ZS-30

〔方法〕

1. 我々は、ERCP（胆道系）の撮影において、撮影すべき部位を表1のように決めた。

2. 表1に示した部位を、十分かつ順序よく撮影が出来るように撮影法を検討した。

〔結果〕

1. 我々が検討したルーチン撮影法（撮影順序と撮影体位）を表2示す。

撮影方向は、RAO、LAOとした。

2. 表2についての説明を以下に示す。

〈1〉軽度のヘッドダウンを用いる事で造影剤の流失を防ぎ、総胆管～肝内胆管が、逆行性に造影される様子を撮影する。 fig.1

〈2〉右側臥位より背臥位にする事で造影剤を胆嚢に集め、胆管及び胆嚢管～胆嚢体部の撮影を行ない、再度右側臥位より腹臥位にして、胆嚢頸部～胆嚢底部を撮影する。 fig.2 fig.3

〈3〉半立位を用いる事で造影剤を緩やかに流し、肝内胆管～総胆管を観察し撮影する。 fig.4

〈4〉立位を用いる事で造影剤をファーター乳頭部に集め、圧迫筒、被検者の呼吸などを利用して造影剤の通過状態を観察し撮影する。 fig.5

〔まとめ〕

今回我々が検討したルーチン撮影法（撮影順序と撮影体位）により、ERCPにおける胆道系の撮影がスムーズに行なえ、撮影担当技師による撮影法の違いがなくなった。

今後、この方法を更に検討し胆道系のみならず膵管も含めた描出の向上、診断価値の高い写真の提供に努力したい。

表1 撮影すべき部位

1	肝内胆管・肝管
2	胆嚢管
3	胆嚢頸部～胆嚢体部・底部
4	総胆管
5	ファーター乳頭部

当院におけるルーチン撮影法

表2 (撮影順序と撮影体位)

1	軽度ヘッドダウン腹臥位
2	右側臥位より背臥位
3	右側臥位より腹臥位
4	半立位
5	立位

fig.1

fig.2

fig.3

fig.4

fig.5

- 参考文献 百瀬 宏：胆嚢撮影法の検討，日放技学誌，30(5)，517-522，(1975)
有山 襄：肝・胆・膵画像診断テキスト，文光堂，東京